

1943年中国山西省における劉莊事件

池本和夫¹

1. はじめに

北京の西300キロメートルほどに山西省第二の都市、大同市がある。日本のNGO、緑の地球ネットワーク（Green Earth Network, 略称GEN）が1992年から大同市及び周辺7県の黄土高原で緑化協力活動を行っている。

山西省は日中戦争中、日本軍が駐屯し、同時に共産軍の抗日勢力が強い所でもあったため、とりわけ省北部では、日本軍による犠牲者が多数出た。GENが活動している大同市及びその周辺諸県でも、戦争の犠牲者が多かった。そのため、GENが活動を始めたとき、地元民の日本人への恨みと向き合わねばならなかった¹⁾。筆者はGENの活動に参加して何度か大同に行ったが、いつかは日本軍がしたことを指弾されるかもしれないという思いがあった。

2000年4月1日、靈丘県上寨鎮南莊村のはずれの山の頂で、近くの村の農民、周金と腰を下ろして、GENが運営する自然植物園や近くの風景を眺めながら雑談をしていた。

彼は急に遠くに見える自分の村である劉莊村を指して、「あの村のはずれにある墓が見えるか。あの村で日本軍が村人を殺した劉莊惨案を知っているか」と、たずねた。初めて聞く話で、「知らない」と答えるしかなかった。持っていた双眼鏡でぞくと、村の西側に記念碑のような人工物が見えた。彼は続けて、「劉莊村で、1943年3月1日、農曆（旧暦）正月25日に、惨案（虐殺事件）があった。日本軍が村民243人を殺し、35戸は家が絶えた。生き残ったのは10人余りで、現在でも生きているのは1人だけだ」と言った。

4月3日、劉莊村に周金をたずねて行き、事件の記念碑を見た。さらに、彼の案内で、当時のままに放置されているという事件現場（地主劉壇の屋敷跡）を見、この事件の唯一の生存者である劉計盛²⁾など3人の老人に会った。筆者は彼らに事件当時の様子を聞くことなどとてもできず、事件を起こしたのと同じ日本人として、ただ彼らに謝るしかなかった。そして、次のように思った。筆者にできることは、この事件について日本側の資料を調べ、もし日本軍が起こしたのなら理由があるはずだから、その理由を明らかにすることであると。

その後、防衛庁防衛研究所図書館などの資料を調べたり、部隊にいた人やその遺族に会ったりしたが、1943年の劉莊事件の記録は見つからなかった。主な原因は、当時靈丘に駐屯していた部隊がその後、フィリピンに移動になり、レイテ島で全滅し、部隊の公的記録が失われたためである。しかし最近、靈丘駐屯部隊に関する資料が見つかり、劉莊事件当時、靈丘や劉莊村に近い上北泉に駐屯していた部隊がわかった。

1 明星大学人文学部(一般教育)教授 中国語・中国文化

2. 日中戦争期の大同・靈丘

1937年（昭和12年）7月7日の盧溝橋事件を契機に日中戦争が始まり、日本軍は華北では山西・山東・河北・チャハル（察哈爾）・綏遠に軍を進めた。山西省では山西作戦を展開し、省北部の交通の要衝、大同にも攻め入った。他方、中国側では同年8月、八路軍（共産党軍）が本部を山西省五台县に置き、9月には山西省北部、靈丘県の平型関で、日本の第5師団を破った。同年11月に省都太原が陥落したが、それ以後、八路軍は日本軍の背後に根拠地を築き、林彪・聶榮臻の第115師は五台山を中心に、山西（晋）・チャハル（察）・河北（冀）方面に勢力を拡大し、晋察冀辺区（晋察冀抗日根拠地）を築いた³⁾。

日中戦争中、日本側から見ると、中国東北部には満洲国、おおむね現在の内蒙古自治区に相当する蒙疆⁴⁾には蒙古連合自治政府があり、いずれも日本の支配下にあった。劉荘事件の1943年（昭和18年）当時、蒙疆に駐屯していたのは駐蒙軍（司令部は張家口）で、大同には配下の第26師団が駐屯していた⁵⁾。師団の主力は独立歩兵第11・12・13連隊⁶⁾であった。張家口周辺は宣化省、大同周辺は大同省で、いずれも蒙古連合自治政府のもとにあった⁷⁾。

劉荘事件があった靈丘県は、現在は山西省大同市治下に属すが、日中戦争当時は日本側からは蒙疆、中国側（中国共産党側）からは晋察冀辺区に属した。県城（県役所）のある県北部はおおむね日本軍が支配し、県城の南の太白山（標高2234m）以南の地域（南山、南山区）は八路軍が支配していた。そのため、靈丘県は日中双方の勢力が衝突する最前線で、戦闘が頻発し、犠牲者が多かった⁸⁾。

『靈丘県志』（462-463、465頁）によると、1937年以降の靈丘県の情勢は次のとおりである。1937年11月7日、晋察冀軍区が成立し、司令部は五台に置かれ、靈丘県は第一軍分区に属した。1940年4月、晋察冀第五軍分区が靈丘県狼牙溝村に成立したが、1941年に廃止になった。1941年12月から1942年初めに、第一軍分区は雁北に指揮所を組織し、高鵬が指揮官になった。1942年12月、第一軍分区雁北指揮所は廃止になり、靈丘県の下関に雁北指揮部が成立し、韓偉が司令員、羅元発が政治委員、陳海涵が参謀長、劉達が政治部主任、尚英が政治部副主任になった。1940年に日本の駐蒙軍第26師団の靈丘駐屯部隊は富沢部隊⁹⁾になり、1941年7月、上寨・下関・上北泉に拠点設けた。上北泉には80人あまり、牛不浪と下関には1個小隊が駐屯した。

3. 劉荘事件

日中戦争後期の1943年（昭和18年）3月1日、現在の山西省靈丘県上寨鎮劉荘村で、村人243人が殺される劉荘事件（中国語では「劉荘三一惨案」）が起きた。事件の第一報は『晋察冀日報』¹⁰⁾ 民国32年（1943年）3月11日号が伝えた。

それによると、「3月1日払暁、靈丘県北泉の敵拠点から敵40人余りと漢奸¹¹⁾4人が出て、北泉から8華里（4キロ）の劉荘村を急に包囲した。（中略）敵は村に入った後、一軒ずつ家捜しをし、偽組織（池本注：日本側の指導で作った組織を指す）の者に強いて、ドラを鳴らして民衆を集め、集会を開かせた。その後、民衆を一軒の中庭に追い込み、銃剣でおどして家の中に入らせたが、部屋は六つしかなく200人以上を収容はできなかった。敵はすぐにドアと窓を閉め、壁に穴を開けて民衆をむりやり中に投げ入れた。敵は手配を終えるやいなや、火を放って家を焼いた。村人215人、男108人・女107人が焼死し、負傷

略奪を行い、漢奸は悪人の手先となって悪事を働いた。(中略)我が村の民衆は抗戦の意気は高く、敵愾心は強かった。劉荘は靈丘県南部の谷間の関門を制しており、脅しに応じなかったため、敵は忘れなかった。北泉に駐屯する敵約70～80名が、民国32年(1943年)3月1日(陰暦正月25日)の払暁、村を包囲し(中略)焼死者はこの村の男女233人と他村の男女10人、逃げた者5人、家が絶えたもの35戸である。村人の6割が死に、劉益三一家のみが隠れて無事であり、山に避難した32戸には被害は及ばなかった……」¹³⁾。つまり、劉荘事件の死者は243名、家が絶えたものは35戸とされる。

劉荘事件に関する資料¹⁴⁾を総合すると、次のような背景があった。

1940年10月、第26師団独立歩兵第12連隊の第1・2大隊が靈丘警備の任についた。隊長は富沢と宮崎¹⁵⁾である。靈丘県城の日本軍は古之河・黄台寺・義泉嶺・南坡頭や上北泉に陣地を設けた。八路軍の南山(靈丘県の南部山間地)根拠地内の日本軍陣地としては、上北泉の陣地は期間が最も長く、1941年7月から1944年5月までであった。この人数は最も多く(常駐50～60名)、重要な拠点であった¹⁶⁾。

靈丘県南部の上寨鎮などには共産党のゲリラ根拠地が設けられ、劉荘村でもゲリラが活動していた。この村では漢奸が村人にゆすりたかりを行っていたが、村人は八路軍に頼んで漢奸を捕まえてもらった。そのため、漢奸は村人や八路軍を恨んでいた。日本軍は靈丘県の各地で八路軍の抵抗に苦しんでいたため、漢奸を利用して八路軍の情報を得ようとした。1943年3月1日未明、漢奸杜大頭や馬合などの手引きで、上北泉の陣地から佐藤隊長が日本軍70～80名・漢奸10名余り・清郷隊50名余り¹⁷⁾を率いて、劉荘村の掃討に向かった。共産ゲリラや八路軍の情報を得ようとしたが、村人の抵抗にあって目的を果たせなかった。そのため、村人を地主劉壇の家に閉じ込めて、ガソリンをまいて火を放ち、逃げる者を機関銃で撃った¹⁸⁾。

4. 事件当時の日本軍部隊

1944年(昭和19年)7月に大同駐屯の第26師団が南方派遣でフィリピンに移動になった¹⁹⁾。師団の移動に伴い、配下の独立歩兵第12連隊も同時期にフィリピンに移動し、その途中、バシー海峡で護衛艦や輸送艦が沈んだが、11月にレイテ島に上陸、1945年4月～7月の戦闘で連隊は全滅した²⁰⁾。戦闘記録は部隊と運命をともにし、失われた。また、日本は第二次世界大戦で破れ、部隊関係の記録や文書が廃棄された。そのため、部隊が靈丘にいた当時の戦闘記録など公的記録は残っていない。

防衛庁防衛研究所図書館所蔵の『独立歩兵第十二聯隊関係収集資料』(以下、『独歩12資料』と略称する)には、手書きの資料や私信などが綴じ込んである。この中の「第二十六師団独立歩兵第十二聯隊編成表(自昭15.3.9 至昭17.7.8)」によると、独立歩兵第12連隊の本部は大同、第1大隊の本部は渾源、第2大隊の本部は靈邱(現在は靈丘と表記)、第3大隊の本部は豊鎮で、第2大隊長は宮崎光雄少佐から富澤太郎少佐に代わり、第2大隊第7中隊長は佐藤明人(正しくは佐藤明雄²¹⁾)中尉から亀田清之中尉に代わっている。

また、『独歩12資料』中の佐藤明雄(1966年当時、熊本県在住)の私信²²⁾によると、佐藤明雄中尉が中隊長をつとめる第2大隊第7中隊は、上北泉に駐屯した後、下関鎮に駐屯した。この時期は1940年(昭和15年)3月から1942年(昭和17年)7月までの間で、中隊長が亀田清之中尉に代わるまでの期間だろう。上の「3. 劉荘事件」で引いた中国側資料には、劉荘事件の前後、靈丘には独立歩兵第12連隊の第1・2大隊が駐屯しており、1941

年7月（あるいは秋）上北泉・上寨・下関に駐屯し、劉莊村を襲ったのは佐藤隊長が率いる上北泉の部隊（常駐50～60名、事件では70～80名が出動）だとある。しかし、次に述べるN氏の話では、1943年3月ごろは上北泉の部隊は第1大隊第4中隊（中隊長は小倉中尉）であり、佐藤明雄中尉が中隊長をつとめていた第2大隊第7中隊（中隊長は亀田清之中尉に交代）ではないという。N氏の記憶が正しければ、劉莊事件を起こしたのが日本軍だとしても、佐藤隊長云々という部分は正しくないことになる。

1942-43年（昭和17-18年）当時、独立歩兵第12連隊第1大隊第1機関銃中隊（中隊長は原田吉満大尉）にいたN氏²³⁾は、2004年9月筆者に、上北泉駐屯部隊について、次のように語った。なお、これは今から60年以上前のことであり、時期に関して記憶の不確かな部分があるのは致し方ない。

昭和17年（1942年）10月あるいは暮に、靈丘に駐屯する第2大隊は朔県（現在の朔州市）に移動し、渾源に駐屯する第1大隊が靈丘に移動して来た。これに伴って、上北泉の部隊は第2大隊第7中隊（中隊長は亀田清之中尉）から第1大隊第4中隊（中隊長は小倉中尉）に交代した。この交代に伴って、私（N氏）が所属する第1大隊第1機関銃中隊の分隊は、昭和17年10月あるいは暮に、上北泉に配属になった。私の分隊は昭和18年春先（3月ごろ）まで上北泉にいたが、その後、上北泉を離れた。昭和17年の経済封鎖の時、第1大隊・第2大隊は部落を燃やしたことがあるし、また、討伐で村人を数人殺したことはある。しかし、上北泉駐屯中には、劉莊事件のような200人以上どころか、20人の村人を殺したというような出来事については聞いたことがない。200人もいれば、男でも女でも抵抗しないことはありえず、これだけの人数を殺すことなどできることではない。また、日本軍が来ると女はすぐ逃げるので、女が100人以上も村に残っているなど考えられない。討伐のときの日本軍のやり方は、村に着くと村人を呼び寄せ、通訳を使って、隊長の言うことを聞けば何もしないと伝える。村人は軍隊ではなく、個々のばらばらなものだ。日本軍は村人を相手にするようなとろいことはしない。日本軍は劉莊事件を起こさなかったという証明はできないが、取って行った物（家畜）から見て、事件を起こしたのは匪賊かもしれない。中国側の資料²⁴⁾には、劉莊事件で日本軍は400匹以上の家畜を奪い去ったと書いてあるが、こんなやり方をするのは匪賊ぐらいだろう。匪賊は泥棒だから、金目のものは何でも取っていく。日本軍の1個中隊（170-180人）²⁵⁾が400匹の家畜を連れて行くことは不可能だ。独立歩兵第12連隊が所属する駐蒙軍はソ連に対する戦闘を想定した部隊であり、軍紀が厳しかった。部落から家畜を連れて部隊に帰ってくるなど、もししたらどえらいことで、軍法会議で重営倉になる。仁や恵兵団（399大隊）は軍紀が乱れていた^{じん めぐみ}ので、この事件に関係があるのかもしれない。しかし、昭和19年7月に第26師団が南方に行ったあと恵兵団が来たが、この時、日本軍は靈丘から渾源の南端に陣を下げていて、靈丘にはいなかった。

以上の話をしてくれたN氏は、1943年春先（3月ごろ）まで上北泉にいたが、劉莊事件を知らないという。事件が起きた3月1日より前に上北泉を離れたため事件について知らないのか、3月1日以降もいたのだが事件は上北泉の日本軍が起こしたのではないため知らないのか、不明である。

N氏の話により、事件に関与した可能性があるものとして、匪賊と別の日本軍部隊が挙がった。N氏によると、日本軍は軍服を着て装備もしっかりしているのに対し、匪賊は着

ているものも装備もばらばらであり、見ればすぐ区別できるという。とすると、もし匪賊が事件を起こしたとしても、村人が匪賊を日本軍と間違えることはありえないだろう。また、別の日本軍部隊が事件に関与したとしても、上北泉から4キロメートルしか離れていない劉荘村で、上北泉の日本軍部隊に知られることなく村人200人以上も殺せるとは、筆者には思えない。

1943年（昭和18年）ごろの写真集²⁶⁾によると、1943年3月、独立歩兵第12連隊は現在の上寨鎮・下関鎮一帯で討伐をおこなっていた。『独歩12資料』やこの写真集などによると、1943年3月ごろ、上北泉に日本軍が駐屯していて、劉荘を含む現在の上寨鎮一帯で討伐を行っていたことは間違いない。しかし、劉荘事件に日本軍が関与したことを示す資料は見つからない。資料がないから日本軍が事件を起こしてはいないとは言えないが、死者の数や略奪した家畜数を含めて、中国側の資料のとおり日本軍が事件を起こしたとも言えない。

5. まとめ

劉荘事件当時の靈丘県上北泉周辺における日本軍部隊の動向が明らかになったが、日本軍が事件を起こしたと肯定する資料も否定する資料も、日本側では見つからなかった。

1943年3月1日に山西省靈丘県上寨鎮劉荘村で日本軍が村人200人以上を殺したという前提で議論を進めてきた。被害の程度はともかく、事件自体は日本軍が起こしたものだと考えており、事件を起こした部隊を明らかにし、村人200人以上を殺すに至った日本軍側の理由を知りたいというのが、本稿の出発点であった。

しかし、事件が起きたころ上北泉に駐屯していたN氏の話聞いて、どの部隊あるいは誰が事件を起こしたのかから検討する必要があると考えるに至った。

事件直後に中国側の新聞が事件について報じている、劉荘村には事件現場だという屋敷跡が今でも事件当時のままとされる状態で残っている、劉荘村には事件の3年後（1946年）に建てた記念碑がある、この3点からして、事件の被害など細部はともかくとして、劉荘事件自体は疑えない事実だと筆者は考えている。

事件が起きた1943年春先（3月ごろ）上北泉にいたのは、駐蒙軍第26師団独立歩兵第12連隊第1大隊第4中隊（中隊長は小倉中尉）であり、また、同じ3月に独立歩兵第12連隊は現在の上寨鎮・下関鎮一帯で討伐をおこなっていたことが、明らかになった。しかし、これらの部隊が事件に関与したか否かは不明である。

事件が起きたころ上北泉に駐屯していたN氏は、事件を起こしたものとして、匪賊あるいは別の日本軍の可能性を指摘したが、これも資料がない。

劉荘事件を起こした可能性が高いのは、当時、靈丘県南部の上北泉一帯にいた日本軍だろうと筆者は考えるが、裏付ける資料はなく、推論に過ぎない。そのため、事件を起こした部隊を明らかにし、なぜ事件を起こしたのかその理由を明らかにするという本稿の目的は、資料不足により十分には果たせなかった。

部隊生存者から新しい話を聞く、部隊関係者の日記など個人的な記録を見る、劉荘村を再び訪問して村人に話を聞く、これらが可能であれば新しい材料が見つかるかもしれない。これは今後の課題である。

〈注〉

1) GEN事務局長の高見邦雄は『ぼくらの村にアンズが実った』（25-26頁）で次のように述

べている。

(1992年秋) プロジェクトを最初にスタートさせた渾源県西留郷にたどりつき、(中略) 屋下がりの西留村を歩いていたら、「リーベングイズ!」という叫びがきこえてきました。漢字であらわせば「日本鬼子!」です。「鬼」というのは、日本ふうの恐ろしく勇ましい鬼ではなく、ひたすらあさましい「亡者」といったところ。声の方向に目をやると、屋からコーリャン酒をやっていたのでしょう、赤い顔をした農民が数人、土塀によりかかって座り込んでいました。

きこえなかったふりをして逃げようかな、と考えました。危ないことに首を突っ込むことはないのです。その一方で、しょっぱなから逃げたら自分に逃げグセがつく、そうしたらここでのしごととはできなくなるかな、なんて考えました。渾源県は日中戦争にさいし中国側の戦略拠点となり、多くの村で犠牲者をだしたのです。

- 2) 彼の名前は、注13の古い方の記念碑に「經理人 劉計盛」として載っている。
- 3) 『中国の歴史(第9巻)人民中国の誕生』(343-350頁)などによる。
- 4) 『戦史叢書 陸海軍年表』(412頁)によると、蒙疆とは「中国の内長城線以北・外蒙古国境以南・満州国境以西の内蒙古をいう。察哈爾省・綏遠省・寧夏省・山西省の一部を包含する地域で、日本軍が支那事変発生後この地方に進攻したとき呼称した。蒙古の蒙と辺疆の語を組合せたという」。
- 5) 『戦史叢書 陸海軍年表』(481-482頁)及び『戦史叢書 北支の治安戦<2>』(341-343頁)によると、1943年(昭和18年)4月の軍編成は次のとおりである。
大本営-支那派遣軍-北支那方面軍-駐蒙軍(司令部は張家口、司令官七田一郎中将)-第26師団(司令部は大同、師団長佐伯文郎中将)。
- 6) 「連隊」は当時の表記は「聯隊」であるが、引用個所以外は、慣用により「連隊」と書いた。
- 7) 『戦史叢書 北支の治安戦<2>』(254-255頁)によると、蒙古聯合自治「政府はまた行政機構の統一整備と能率化を期するため昭和18年1月1日から「宣化省」、「大同省」を設けることとした。元来、聯合政府は察南、晋北両政庁と蒙古聯盟の三自治政府が合体して発足したものであるが、今回、察南、晋北両政庁を改編して宣化、大同両省とし、五個の盟公署も中央に直結するよう改組し、もって中央の統制力強化、機構の簡素化、行政の一貫性を図ったものである」。
- 8) 第26師団長の日記『佐伯文郎中将(23期)日誌』(『戦史叢書 北支の治安戦<2>』516頁に引用)によると、靈丘周辺は中国側の勢力が強く、日本軍の統治は行き渡っておらず、「朔縣地区は、県及び警察が一体となり且つ青年出動隊、皇協団等が軍の施策に策応し成果をあげあるも、他地区は未だこの域に達しあらず。特に靈邱周辺は敵地の感あり。県の総人口一三万五千、うち治安地区住民三万五千、住民の1/3~1/4は無学にして彼我力関係により、いずれにも就く状態なり。県行政の根本的建直しと警備隊の活発な肅正討伐を要す」という状況であった。
- 9) 独立歩兵第12連隊第2大隊、大隊長は富沢太郎少佐。『独立歩兵第十二聯隊関係収集資料』の「第二十六師団独立歩兵第十二聯隊編成表」に名前が出てくる。
- 10) 日中戦争期の中国共産党中央晋察冀分局の機関紙で、1937年12月11日に『抗敵報』として創刊され、1940年11月1日に『晋察冀日報』に改称した。
- 11) 漢奸とは「民族の裏切り者の意。日中戦争で日本に協力した中国人を指す。元々は漢民族の腐敗分子の意味」である(『岩波現代中国事典』152頁、「漢奸」の項)。
- 12) 『晋察冀日報』1943年3月11日号(第1141期)第1面左上に載った、劉莊事件の記事全文は次のとおりである。原文は縦書き、□は判読不能箇所を示す。なお、同じ第1面の右上には、「爲劉莊慘案而控訴」と題する、日本軍の残虐行為を非難する社説が載っている。『晋察冀日報』の現物は見ることができず、一橋大学図書館所蔵のマイクロフィルム版によった。
敵寇殘暴絶倫／靈邱劉莊發生驚人慘案／燒殺羣衆二百餘滅門廿一家／我政府團體派員慰問救濟／
本報特訊：本月一日拂曉，靈邱北泉敵據點出敵四十餘人，漢奸四名，突將距北泉八里之劉莊包圍，該村平時即支應敵人，羣衆受漢奸欺騙，對敵陰謀表現麻痺，故未退避村外，敵入村後，即按家搜索，強迫偽組織人員打鑼召集羣衆開會，然後將羣衆趕進一個院子，用槍刺威逼羣衆進屋，該院僅有房屋六間，二百多人無法納容，敵即將門窗□(緊?)閉，從牆上□(穿?)洞將羣衆強行投入，敵佈置已畢，即縱火燒房，計燒死□□(村民?)二百一十五

人，内男一百〇八人，女一百〇七人，負傷者七名，滅門者□(達?)二十一家之多。第二日敵又到該村，將附近村莊前往慰問及收屍者打死七名，附近各村羣衆聞此消息，悲憤異常。靈邱縣政府及縣羣衆團體特派幹部□(趕?)往出事地點慰問，調查救濟，並發表宣言，揭發敵人暴行，號召附近村莊的羣衆，接受劉莊事件血的教訓，堅決不支應敵人，跟敵人頑強鬥爭到底。(以上、記事全文)

- 13) 靈丘県上寨鎮劉莊村に劉莊事件の記念碑は2基ある。古い碑は文字が読みにくいので、新しい碑の碑文を書き写した。二つの碑の本文は確認した限りでは同じ内容だが、末尾の建立関係者の部分は異なる。原文は縦書きで、簡体字・繁体字・俗字がまじっている。可能な限り原文通りに復元し、誤字と思われる箇所は[]内に示した。句読点も原文の通りである。碑文で32年とは中華民国32年で、西暦1943年に当る。

庸誌復仇

三一慘案略記

溯自七七事變，日寇侵華，而晋察冀邊區受禍之烈，我劉莊獨云甚焉，三十年秋，日寇設碉堡分駐北泉、上寨、下关每日四出燒殺擄掠汗[漢]奸更為虎作倀，肆行紛扰[扰]必欲造成無人區，以遂其亡國滅種之謀，正因我鄉民衆抗戰情高，敵愾意深也，劉莊扼南峪之門戶，勒索不應，各局敵偽所志駐北泉之敵約七八十名於三十二年三月一號(陰正月二十五日)拂曉將村包圍沿戶搜人驅集村西劉檀院東西房內，堵門塞草撒瓦穿穴，外而機槍密佈，敵偽環伺猝然一炬，哭號震天，地突躍崩，四壁而敵方狞面狂笑，添薪[薪]助燃間有出者亦皆死於機槍刺刀之下。敵去村，人遠避山沟者始返，但見焦頭斷骨急壓未熄，零絮片衣飛騰尚然，欲救則无一生，人尋尸皆不可識辨，慘狀錐心嚔啞几絕，翌日敵復率民夫掘尸於骨分填近处坑陷意在滅跡，以掩世人之眼目，法西斯之毒辣蠻暴殘[慘]无人道，固如斯乎此案，共計燒死者本村男女二百三十三人外村戚友男女十人，逃出五人，絕亡三十五戶，村人死十之六，僅劉益三一家密藏无恙，遠避山沟三十二戶未及於案，餘則孤男寡女零丁老幼皆不成家，嗚呼痛哉，三十四年春，日寇敗退，三十五年村人漸集乃開三週年慘案追悼大會，議將死者之慘骨擇地埋葬，再可立石，以紀其姓名，施蒙縣府區所贊助，故能迅速施事，今逍遙地之巍然，双塚既死難者合葬处翼然亭，即村所刻之紀念石也，余未能文勉綴始籍，當一哭村有長歌，足以訴世而慰幽魂矣。

劉莊村抗日聯合委員會立*

- * 古い碑では、新しい碑の末尾の「劉莊村抗日聯合委員會立」がなく、その代わりに次の文字がある。□は判読不能箇所を示す。

孟維璧	敬撰	劉存仁	張文田	合書	
經理人	劉德修	劉培□	劉振倫	劉海	
	劉振興	周風	劉燭	劉芬	泥工 劉義
	劉益三	劉計盛	郭良維	劉灯	
	劉凱	劉訓	劉誓	劉泌	石工 甄雪臣
				李兴华	

- 14) 次の資料が事件に言及している。

『抗日戦争時期山西大事記』298頁。

『晋察冀根拠地(山西部分)大事条日選録』113頁。

『(送審稿)晋察冀革命根拠地大事記(山西部分)1937年7月-1949年1月』123頁。

『晋察冀革命根拠地晋東北大事記 1937.7-1949.9』183頁。

『中国共産党靈丘県歴史大事記述(1937-1949)』114-115頁。

『大同文史資料(第25輯)靈丘県專輯』206-208頁。

『大同文史資料(第27輯)紀念抗日戦争勝利50周年專輯(1945年-1995年)』268-269頁。

『靈丘文史資料(第3輯)紀念抗日戦争勝利暨靈丘解放50周年專輯』155-156、164-167、172-173、194-196、218-221頁。

『日本帝國主義侵華档案資料選編 華北歴次大慘案』485-491頁。

『靈丘県志』477-478頁。

- 15) 『独立歩兵第十二聯隊關係収集資料』の「第二十六師団独立歩兵第十二聯隊編成表」によると、第2大隊長は宮崎光雄少佐から富澤太郎少佐に交代しているので、「第1大隊・第2大隊の隊長はそれぞれ富沢と宮崎」という中国側の資料(『靈丘文史資料(第3輯)』218-219頁)

は、間違いである。

- 16) 『靈丘文史資料(第3輯)』218-219頁。
 17) 『晋察冀根拠地(山西部分)大事条目選録』113頁では「敵四十余人及偽軍三十余人」、『晋察冀革命根拠地晋東北大事記 1937.7-1949.9』183頁では「日偽軍130余人」となっており、劉莊をおそった日本軍部隊の人数は資料により異なるが、70~80名とする資料が多い。
 18) 『大同文史資料(第25輯)』206-207頁、『大同文史資料(第27輯)』268-269頁、『日本帝国主義侵華檔案資料選編 華北歴次大惨案』488-489頁、『晋察冀根拠地(山西部分)大事条目選録』113頁。
 19) 昭和19年当時の日本軍に対する中国側の見方が『独立歩兵第十三聯隊第六中隊誌』(169-170頁)に、次のように記録されている。注はいずれも引用者(池本)による。

その頃(注:昭和19年7月)、(注:中国の)晋西北軍司令部が隷下部隊に通達した文書を(注:日本軍が)手に入れたが、その中に「大同地区の日本軍は正規軍ではなくて雑軍であり、その戦力不足を補うため、偽軍や傀儡軍を前線に配置し、中国人同志を戦わせよう」と目論んでいる……というくだりがある。

彼等のいう偽軍とは、蒙古軍や晋北、察南の両政府の警察隊などを総称して呼ぶ言葉であり、傀儡軍とは彼らをしていわしめるならば、日本軍によって操られている操り人形のような軍隊という意味の軍隊である。実際、当時駐蒙軍管下にはいくつかの謀略部隊があり、それらのうち主なものは、綏西連軍(王英)、東亜同盟軍(白鳳翔)、西北回教軍(蔣輝若)、オールドス蒙古挺身隊などが知られていた。

中国側の文書で「大同地区の日本軍は正規軍ではなくて雑軍であり」というのは、駐蒙軍第26師団が南方戦線に移動になった後の手薄になった日本軍を意味しているのかもしれない。

- 20) 第26師団及び独立歩兵第12連隊の動向は、『昭和四十一年六月 南方・支那・台湾・朝鮮(南洋)方面陸上部隊略歴(第四回追録)』によると、次のとおりである。

第26師団司令部(泉第5311部隊)は昭和12年9月30日に名古屋で編成し、その後大同に駐屯した。19年7月22日、南方派遣のため駐屯地大同を出発、8月22日ルソン島マニラに上陸、20年8月15日停戦、9月2日終戦となった。(201頁)

第26師団所属の独立歩兵第12連隊(泉第5315部隊)は昭和12年9月30日に岐阜で編成し、その後大同に駐屯した。19年7月19日、南方派遣のため駐屯地大同を出発、8月25日マニラ上陸、10月27日マニラ出発、11月3日レイテ島オルモックに上陸した。20年4月5日から7月3日までのカルブコスの戦闘において部隊は全滅した。8月15日停戦、9月2日終戦となった。少数の生存者は停戦後、武装を解除され、米軍の収容所に収容され、終戦後個別に復員した。(207-208頁)

- 21) 『独立歩兵第十二聯隊関係収集資料』中の「独立歩兵第十二聯隊会連絡先名簿」には、「亀田清之 第7中隊長 岐阜市……」、「佐藤明雄 第7中隊長 熊本県……」とあり、さらに熊本県在住の佐藤明雄の私信も綴じてあるので、佐藤明人中尉は佐藤明雄中尉の間違いとわかる。

- 22) 防衛研修所戦史室陸上班からの問い合わせに対する返信で、「昭和41.2.10」の消印がある。主な内容は次のとおりである。□は判読不能文字、句読点は原文どおりである。注はいずれも引用者(池本)による。

第二大隊本部は靈邱にあり広靈に一中隊、古子河に一中隊、其後、靈邱南方六キロ、上北泉に小生中隊駐屯す、其後、下関鎮に我第七中隊は26D(注:26師団)の最前線大同南方、山西省と河北省との省境近く駐屯しました。(4枚目)

特に前の駐屯部隊は、靈邱城より渡河して南下した事は一回しかないと言った消極的な作戦であったので夜間一部の兵力を残して不意急襲するには其手が必要であった……。(6枚目)

上北泉に駐屯した時は(注:敵は)前部隊と混同し我部隊をなめていた。その為に駐屯当時は約一ヶ月の間敵をおびきよせる為聯隊命令にも従はず出動しなかったので大変叱られた事もあった……。(7枚目)

次いで下関鎮に駐屯した時は部落から離れた小丘に陣地と兵舎を兵隊の力で風呂場から一切作り上げた。(8枚目)

靈邱南方の谷間は地雷で悩まされるので、稜線の間道及近道を便衣隊を十名程編成し□袋に軽機(注:軽機関銃)を入れて背負い靈邱南方は箱庭だと言った位精通したどんな暗

闇でも稜線は安心して通れた。(9枚目)

23) N氏は1944年7月に所属部隊が南方に移動するとき、病気で陸軍病院に入院していたため大同一に残り、中国で終戦を迎え復員した。

24) 『靈丘文史資料(第3輯)』172-173頁の「附:日軍在侵占靈丘期間製造的慘案統計表」。

25) 師団の戦時編成は『日本陸海軍事典』(500頁)などによると、次のとおりである。

師団:25254人。3個連隊。

歩兵連隊:3747人。本部224人、3個大隊(1091人×3個)、歩兵砲中隊161人、速射砲中隊89人。

大隊:1091人。本部120人、4個歩兵中隊(194人×4個)、機関銃中隊139人、歩兵砲小隊56人。

中隊:194人。本部班、4個小隊。

小隊:40人前後。3分隊。

分隊:12~13人。

26) 防衛研究所図書館に『独歩第十二聯隊東嶋登大尉写真資料(その一、その二)』と題する写真集が所蔵されている。次の写真説明文から、1943年(昭和18)年3月、独立歩兵第12連隊は現在の上寨鎮・下関鎮一帯で討伐をおこなっていたことがわかる。なお、上寨は上寨の間違いである。東嶋登大尉はレイテ島で重傷を負いながらも生還し、1956年(昭和31年)12月に死去した。

その1 目録

N. 昭18.1 靈丘南方地区の討伐(2枚)

その2(池本注:写真の右下に番号、左下に説明がある)

11. 昭18.3 上寨・下関の肅正

12. 昭18.3 上寨・下関作戦

13. 昭18.3 上寨・下関作戦、五台の險を望む

〈参考文献〉

厚生省援護局(編)(1966)『昭和四十一年六月 南方・支那・台湾・朝鮮(南鮮)方面陸上部隊略歴(第四回追録)』厚生省援護局

山西省地方志編纂委員会弁公室(編、刊?)(1984)『抗日戦争時期山西大事記』

山西省靈丘県志編纂委員会(編)(2000)『靈丘県志』山西古籍出版社

山西省靈丘県党史研究室(編)(1994)『中国共産党靈丘県歴史大事記述(1937-1949)』山西人民出版社

大同市政協文史資料委員会(編、刊?)(1994)『大同文史資料(第25輯)靈丘県專輯』

大同市政協文史資料委員会(編、刊?)(1995)『大同文史資料(第27輯)紀念抗日戦争勝利50周年專輯(1945年-1995年)』

第六中隊誌刊行会(編)(1985)『独立歩兵第十三聯隊第六中隊誌』第六中隊誌刊行会(大川市)

高見邦雄(2003)『ぼくらの村にアンズが実った——中国・植林プロジェクトの10年——』日本経済新聞社

中央档案馆等(編)(1995)『日本帝国主义侵華档案資料選編 華北歴次大惨案』中華書局

中共山西省委党史研究室資料徴集処(編、刊?)(1985)『晋察冀根拠地(山西部分)大事条目選録』(油印本)

中共山西省委党史研究室晋察冀革命根拠地(山西部分)史料徴編組(編、刊?)(1988)『(送審稿)晋察冀革命根拠地大事記(山西部分)1937年7月-1949年1月』

中共山西省委党史研究室(編)(1991)『晋察冀革命根拠地晋東大事記 1937.7-1949.9』山西人民出版社

野村浩一(1974)『中国の歴史(第9巻)人民中国の誕生』講談社

原剛・安岡昭男(編)(1997)『日本陸海軍事典』新人物往来社

東嶋登(撮影)『独歩第十二聯隊東嶋登大尉写真資料(その一、その二)』防衛研究所図書館所蔵

防衛庁防衛研修所戦史室(編)『独立歩兵第十二聯隊関係収集資料』防衛研究所図書館所蔵

防衛庁防衛研修所戦史室(編)(1971)『戦史叢書 北支の治安戦<2>』朝雲新聞社

防衛庁防衛研修所戦史室(編)(1980)『戦史叢書 陸海軍年表』朝雲新聞社

靈丘県政協文史資料委員会(編)(1995)『靈丘文史資料(第3輯)紀念抗日戦争勝利暨靈丘解放50周年專輯』靈丘県政協文史資料委員会